慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テ・イ・オイゼルマン著 森宏一訳 マルクス主義哲学の形成
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.4 (1967. 4) ,p.455(105)- 456(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19670401-0105
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670401-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

氏原正治郎著
『日本労働問題研究』

本書は、氏原教授が、一九四五年から五五年に至る十年間に執筆した論文のうち、数篇をえらんで編纂されたものである。つぎのような内容から成っている。

序章　社会政策の社会理論のために
第一節　社会政策の社会＝経済理論の提唱
——服部教授の問題提起——
第二節　社会政策の社会理論の欠如——大河内教授の服部教授にたいする回答——
第三節　社会政策なき社会政策論——岸本助教授の大河内教授批判

Ⅰ　賃　金

第一章　日本資本主義の賃金構造
第二章　わが国における賃金問題の所在
——賃金率を中心として——
第三章　賃金体系の一考察——生活給と能率給
第四章　労働時間・生活時間問題の所在
補論1　いわゆる「賃金体系」について
——「電産型賃金」の歴史的意義——
補論2　女子労働者の賃金問題
補論3　男女同一労働同一賃金
補論4　家庭内職の論理

Ⅱ　社会保障

第一章　社会保障の理論と日本的条件
第二章　賃金と社会保障
第三章　国民生活と社会保障——わが国における国民生活の社会的性格
第四章　失業政策における「保険」と「救済」

Ⅲ　労働市場

序章　労働市場解明の課題と方法
第一章　大工場労働者の性格
第二章　労働市場の模型
第三章　日本農村と労働市場
補論　常用工と臨時工

あとがき

この目次からも明らかなように、本書は、実に多様な内容を有しており、著者の学問的関心の広さをうかがわせるに充分である。すなわち著者は序章においては、従来の社会政策論争を批判的に回顧し、(一)論争当事者の間に共通した問題意識が存在しながら、問題の内容の理解についてはそれぞれ異なった意識が存在したこと、(二)社会政策の正しい理解のためには、資本制社会の経済理論と同時に、その社会理論、その基礎範疇としての国家、資本家、労働者、階級闘争の歴史的形態を、資本制生産の発展にかかわらしめて明らかにすることの必要性、(三)社会政策とは、資本制社会を創出し、維持し、発展せしめ、かつ防衛するところの、その諸発展段階に応じて形態を異にする、労働者にたいする近代国家の政策体系である（五一頁）という立場をとる。また賃金については、著者は、「低賃金克服の方向」として、「機構上の変革をともなう強力な横断的労働組合組織の確立と社会保障のみがそれを可能にする」として（八七頁）、賃金体系、労働時間、男女同一労働、同一賃金についてふれている。

また、Ⅱ社会保障については、著者は、わが国の社会保障制度の危機についてふれ、その危機は、たんに制度的危機であるだけでなく、労働者階級の生存の権利を階級として保障してきた資本主義体制そのものの危機を意味し、労働者が保障されているべき生存のブルジョア的権利の危機であるとして、その資本主義の特殊的な現われを一般的法則の現われとして把握するのでなければ、正しい問題の所在と解決の方途を見出すことができないとされる（二七一—二七二頁）。

Ⅲ労働市場においては、わが国の大工場労働者の性格を中心に、きわめて実証的に、特異な労働市場の態様を研究している。この部分こそ著者がもっとも得意とするところであり、著者の調査経験が遺憾なく生かされているところといえよう。その多方面的な且つ精力的な勉強に、われわれは敬意を覚える。しかしながら、この著書は、やはり論文集のためか、ややまとまりのなさを痛感せしめる。社会政策・賃金および労働市場問題を、日本労働問題と名づけたものの、それら相互の間に、一体どのような論理的関係があるのか全く明らかではない。体系化が十分でないことが最大の弱点である。とくにここに集められた論文自体、一九五五年までという古い時期の産物であるためか、たとえば賃金においても、職務給などの現下の労働問題の最も重要な問題についてふれていないのは惜しまれる。（東大出版会・一九六六年十一月刊・A5・四八三頁・一八〇〇円）

—飯田　鼎—

テ・イ・オイゼルマン著
森　宏一　訳
『マルクス主義哲学の形成』

「初期マルクス」の研究は、今日、学界におけるひとつの流行ともなりつつある。それは、経済学者、哲学者はもちろんのこと、社会学者や一般にひろく思想史を研究する人々にとっても好個の研究題目としてえらばれている。しかし「初期マルクス」の時期を、もしわれわれが、一八四二年から一八四八年に至る時代を指すとした場合に、考えるべきことは、あまりにも多いのではなかろうか。まず圧倒的な影響をもっていたヘーゲル哲学への批判と検討、その克服と自己の体系樹立のための苦闘の過程が、複雑且つ困難な問題として読者を悩ます。たとえば経済学・哲学手稿にあらわれた、「疎外論」の評価の如き、これを極端に重視して、それがあたかも「初期マルクス」におけるの中心問題であるかのように考えることは果して正しいのであろうか。この「疎外」という概念は、ヘーゲルがはじめてつかったのであり、とりわけ、その「精神現象学」における中心的な問題となっているのであり、富、国家権力、その他の社会制度を、人間本質の疎外とみなしているが、しかしこの場合、ヘーゲルのいう「疎外」とは、ただ思考のなかでだけ生ずるところのものである。ところが、マルクスの場合、「疎外」とは、人間の本質的、類的力の発展の帰結として、すなわち、労働と資本とのますます深まりゆく矛盾の結果としてあらわれるのであって、それこそまさしく「疎外」された労働なのである。すなわち私有財産の結果としてあらわれざるをえない「疎外」された労働としてとらえるのであり、多面的な人間観における必然的なモメントとしてみなす唯物論的立場にマルクスは立つのであって、その意味では、いわゆる哲学的人間学の立場において、マルクスの疎外論を理解する——たとえば和辻哲郎「人間の学としての倫理学」に典型的に代表される——学派や実存主義とは全く相容れないものではないだろうか。この点について、われわれは著者の深い洞察をみることができよう。

つぎに「初期マルクス」を読む者にとってさらに大きな問題は、一八四八年以前のマルクスとその後の「成熟したマルクス」——こういう表題が果してゆるされるかどうか問題であるが——との関係について、誰しも想い

をめぐらすであろうということである。しかしわたくしにとって、従来、疑問でならなかったのは、「初期マルクス」と、それ以後のマルクスとを決定的に区別するものは何かということである。観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義への変化、その思想上の転換を決定的ならしめたものこそ、一八四八年の革命ではなかったろうか。この革命以後のヨーロッパ資本主義の発展があってはじめて「資本論」が生まれてくるのではなかろうか。

以上のようなことを考えながら、わたくしは本書をよみ耽った。われわれはさきに、同じソヴェートの研究者ローゼンベルクのすぐれた業績「初期マルクス経済学説の形成」（青木書店、副島種典訳一九五七年）をもっている。本書は、まことにこれと好一対であり、マルクスの哲学体系の樹立の全過程を克明に分析したものであり、マルクス主義研究者には一読の価値がある。もっとも興味深く教えられるところの多かったのは「疎外論」であるが、とくに第一部のはじめに、少年時代から青年時代にかけてのギムナジウム期のマルクスについての考察は詳細である。

しかし、このギムナジウム時代からヘーゲル哲学への深酔、そしてやがてその批判克服の過程における人間マルクスの苦悩はどのようにあらわれたのかが明らかではない。宗教との闘い、信仰と理性、宗教と科学との関係において、初期のマルクスは、いかに悩み且つこれらの問題を克服していったのか。批判と克服の事実については詳細に書かれているけれども、マルクスとエンゲルスという二人の巨人の内心の葛藤、その思想的な煩悶は一体どのようであったのであろうかと考えるとき、本書の著者はどう考えたのであろうか。もちろん、マルクスとエンゲルスは、J・S・ミルのように「自叙伝」を残さなかったし、従ってまた彼にみるような「二〇歳の憂愁」というようなものについて、具体的にのべてはいないけれども、初期のマルクスには、そのようなものがなかったはずはない。「初期マルクス」の研究は、このような点からも考察されるべきではないだろうか。その意味で、本書も、マルクスとエンゲルスをやや理想化している欠点が目立つ。しかし詳細な研究である。一読に値する。（勁草書房・一九六五年刊・B6・全二冊・八一七頁・一九二〇円）

—飯田　鼎—

一〇六（四五六）

内田忠夫・栗林　世　矢島　昭・渡部経彦　著

『経済予測と計量モデル』

計量経済学の書物ではその方法を主体とするものと、実際の経済モデルの構成を主とするものとがあるが、本書は後者に属し、実際に日本経済の短期予測のモデルを構成している。この種のモデルについて興味ある人にとっては、よい参考となろう。本書の目的はまえがきに述べられている。「短期経済予測が有効に行われ、それが適切に経済政策に反映されていくことによって、少しずつではあっても、（そしてかなり迂遠な方法であっても）私たちの生活が豊かになる手がかりになればというささやかな希望が、本書をつくった一つの動機となった。確かに一九五〇年代からの計量経済学（エコノメトリックス）の進歩は、理論的にも応用的にも大きかったし、そして多くの経済学者たちの共有財産となりつつある。しかし予測という複雑な現実と密接に関係した問題を扱うのにはまだ〝ひよわ〟な面が多すぎるかもしれない。こういった状況判断での行動原理としては、常に do-nothing か、試行錯誤の積み重ねかの選択が私たちに要求される。そして私たちは、まさに後の道を選んだわけである。」と書かれている。本書は8章からなり、第1章、経済予測の一般的考察で予測とは何かという問題をとりあげ、第2章、昭和40・41年度見通しとその評価、でモデルによる予測方式を日本経済に適用した結果とその評価が具体的に示される。第3章、推定されたモデルとその理論的性質、第4章、構造方程式のスペシフィケーション、第5章、モデルのテスト、では予測に使われたモデルの理論的基礎と具体的なスペシフィケーション及びその説明力に関するやや詳細な記述が行われる。第六章、シミュレーション分析、では政策効果の9分析を中心とする、いくつかのシミュレーション結果の紹介がある。第7章、統計的方法と計算プログラム、第8章、予測誤差の分析、ではモデル分析に関する統計的方法、予測誤差および計算プログラムの設計等のやや技術的問題がとりあつかわれている。全体として日本経済の最近の様相を知るには非常に好都合であるが、その背後の統計的計算方法を知るには頁数の関係もあってやや簡単難解といえるであろう。最後に本書の強調する点は、「経済予測という問題は、往々にして予測値の正確さということだけで評価されがちである。私たちがここで取上げた研究は、単に予測値の正確さということよりは、理論的に構成されたモデルを定量的に操作可能な形に変換してゆく過程についての研究である。」ということである。（日本経済新聞社・昭和四一年一一月刊・B6・二五三頁・九四〇円）

—佐藤　保—

＊　＊　＊

浜林正夫著

『イギリス革命の思想構造』

八年前に刊行された著者の『イギリス市民革命史』は、イギリス市民革命の政治過程、革命の経過を追ったものであったが、本書はイギリス市民革命期の思想家の類型を設定し、これを市民革命のなかで位置づけ、近代思想の成立を革命の思想との関連でとらえようとしたものである。

本書収録論文の大半は、昭和三一年から最近までに「歴史学研究」、「商学討究」、小樽商大「人文研究」に発表された独立の論文であるが、本書を貫ぬく著者の基本的視角は、序章「思想の革命と革命の思想」のなかに端的に示されている。ホッブスにおいて開花する近代思想は、市民革命によって成立したものでありながら、実は当初から革命を拒否するものであった。近代思想といわれるものは革命思想のなかからその革命的部分を切りおとしたところに成立する。市民革命の成果だけをつみとった階層、ブルジョア・ジェントリーの思想が近代思想であるならば、市民革命の渦中にあって、これを押し進めた「革命の思想」とは何であったのか。本書で著者が据えた視角はこれである。

第一章「ピューリタニズムの思想」においてジョン・オウエンの思想が分析され、以下第二章「ヒューマニズムの思想」、ウィリアム・チリングワース、第三章「経験論の思想」、ジェームズ・ハリントン、第四章「神秘主義の思想」、ジョージ・フォックス、第五章「平等派の思想分析」、ジョン・リルバーン、ウィリアム・ウォールウィン、リチャード・オーヴァトン、第六章「十八世紀への展望」、レイフ・カドワース、ウィリアム・テンプル、ジョン・ロックが分析されている。これら十人の思想家について著者の分析を逐一紹介する余裕はないので、ここでは著者の